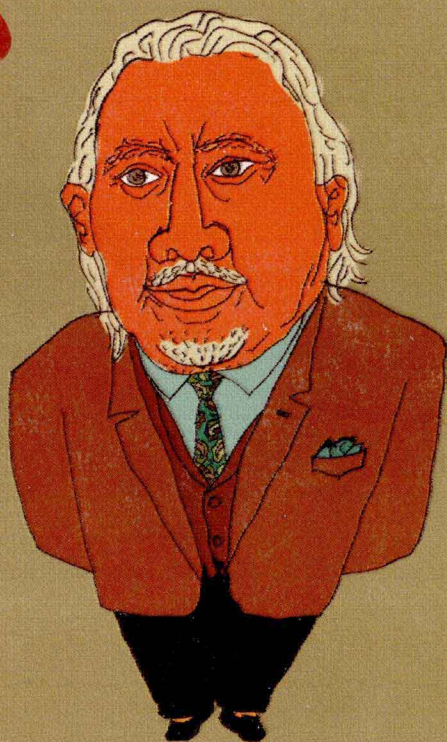


徳大寺有恒



ふ男に
生まれて

ぶ
男に生まれて
徳大寺有恒

徳大寺有恒（とくたいし・ありつね）

1939年東京生まれ。成城大学経済学部卒業。

16歳で小型自動車免許を取得。

大学の自動車部を経てトヨタ・ワークストライパー

第2回日本グランプリラリー出場などプロ・トライパーとして活躍。

カー用品会社経営後 モータージャーナリストに。

1976年に『間違いたらけのクルマ選び』（草思社）が大ベストセラーとなる。

以降 年度版として毎年全編書き下ろして『間違いたらけ』を刊行するとともに雑誌『NAVI』（二玄社）などを拠点に批評活動を展開している。

他の著書に『ぼくの日本自動車史』（草思社）

『ああ 人生グラント・ノーリンク』（二玄社）

『58歳からの乗々運転術』（草思社）など多数。

ぶ男に生まれて



1999年12月20日 第1刷発行

著 者 徳大寺有恒

発行者 土井尚道

発行所 株式会社 飛鳥新社

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町3 10

神田第三アメレックスビル

電話 03-3263-7770（営業）

03 3263 7773（編集）

アドレス <http://www.asukashinsha.co.jp/>

印刷・製本 日経印刷株式会社

落丁、乱丁本はおとりかえいたします。本書の無断複写・複製・転載を禁じます。
×定価はカバーに表示してあります。

©Artsune Tokudaiji 1999, Printed in Japan

ISBN4-87031-387-1

はじめに

小さな頃から男コンプレックスに悩まされて、どうやったら女に相手にされるのかと来る日も来る日も考えながら過ごした。

成城大学時代には、田舎者コンプレックスに襲われて、どうすれば都会的になれるのか、背伸びしてそればかり考えていた。

そのうち、貧乏コンプレックスにみまわれて、どうにかして金持ちになりたいと思うようになった。金が欲しいというよりも、金があれば好きなことができる。カッコつけるには金がある。カッコがつけば女に注目される。ただそれだけのことなのだが、それはそれで深刻な悩みではあった。

しかし、それがいかに暇な悩みであつたかを思い知らされるような出来事が、僕の人生にはあつた。

大学を卒業して、就職したのは「本流書店」(現・島田洋書)という洋書屋だった。

僕がこの会社を選んだのは、本流書店が外国の自動車の本を扱っていたからだ。つまり、

自動車好きが高じて選んだ職場だったんだけど、この自動車好きをさらに刺激するように、本田宗一郎さんが作った鈴鹿サーキットで、第一回日本グランプリが開催された。1963年のことだった。

なんと、僕は、このグランプリを観戦し、「レーサーになりてえ」と思ってしまった。なにしろ、当時、素人で僕より運転の巧いヤツはいないと自負していたほど、運転には自信があったからね。

さっそく、既にレーサーをしていた友人の式場^{しきば}壮吉^{そうきち}君に相談した。すると、式場君がトヨタのオーデイションを受けられるようにトヨタの人を紹介してくれた。とんとん拍子にことが運び、僕は晴れてトヨタの契約ドライバーになることができた。

当時は、自動車というものがまだ一般的なものではなかった時代だから、レーシングドライバ^イバーになることは、すなわち女にモテることを意味していた。僕は、トヨタからコロナの新車を一台もらっていたから、絶対にモテるはずだったのだが、なぜか女には全くモテなかった。それでも、前途洋々。これで、さまざまなコンプレックスから解放されるはずだった。ところが、すぐに首になっちゃったんだ。

理由は実にシンプルで、走るのが遅いから。ショックは受けたが、文句はなかった。実際

はじめに



にレーサーになってみて、世の中に運転の巧いヤツはたくさんいるのだということを思い知っていた最中だったから。

そこで、気分を変えて、もらったコロナでラリーに参戦したら、こちらの方では連戦連勝。かろうじて面目を保つことができた。

30代で30億の負債を抱えたこともある

当時、トヨタには5人ほど優秀なドライバーをヨーロッパに連れていき、ドライビングスクールに入学させたり、コースを走らせたりするシステムがあった。

ある年、式場君がそのメンバーに選ばれた。その時、式場君はおみやげにステイアリングを皮で巻いたものを買ってきてくれたんだ。その頃は革をきっちり巻いたステイアリングはまだなくて、その前身として売られていたのがそいつだった。当然、日本では見たこともない。僕は、こいつを作って売ってやろうと考えた。

こうして、「レーシングメイト」という会社が生まれた。

資金なんてなかった。経営ノウハウも独学だった。会計は勉強したが、ほとんど自己流。勘だけが頼りの思えば無謀な試みだった。

それでも商品は飛ぶように売れた。間屋は何本でもいいから卸せと言ってくる。すると会社の規模が大きくなる。瞬く間に社員は40人を越えた。プライベートでの金の使い方も変わる。元来、宵越しの金は持たないタイプだから、銀座で使う、クルマを買う、どんどん消費する。

25歳の若造が大金を手にしてよいことなど起こるわけがない。生意気になった。人を使うことを覚えた。ウハウハと過ぎていく毎日。本当はそういう時こそ慎重にことを運ばなければならなかったのにもかかわらず、相変わらず僕の武器は、勘だけだった。

そんなある日、閃きがあった。テールランプの改良である。

自動車の後ろのテールランプというのは、ストップランプと方向指示器とバックアップランプだ。僕はこれを方向を示す具合に光が流れるようにしたいと考えたんだ。できればリアウィンドウの下、ちょうど目の位置くらいが理想だと思って試作してみたんだけど、その制作費に目茶苦茶な金がかかった。計算が崩れる。気持ち焦る。

そんな時、あるオイルの売り込みがあった。エンジンというのは、金属と金属を擦っている。オイルに滑るものを混ぜたら、うんと抵抗がなくなるといのがそのオイルだった。試してみると、なるほど回転がうまくいく。そこで、それに手を出した。だけど、そういうも

のは目で見てわかるものじゃないから、宣伝にうんと金がかかるんだ。ここで、また計算が崩れた。明日が見えなくなった。

レーシングメイトが倒産したのは、僕が30歳の時だった。後には、今の金で30億円くらいの負債が残った。

ポケットに500円。それが全財産だった

会社を整理するのには、1年くらいかかった。毎日頭をさげて歩き、借金取りに追い回された。日本刀を持ったヤクザに監禁されたこともあった。

猛暑の夏。太陽は容赦なく照りつけてくる。ビートルズ解散が大きく報じられ、大阪では、高度成長のあかし万国博覧会が開催された年だ。でも、世の中で何が起こっていたとしても、その全てが僕には無縁なことだったんだ。

ある時、ポケットの中を探ると金が500円しかなかった。これが全財産かと思ったたら愕然とした。

それでも、僕は死のうと思ったことは一度もなかった。

ひとつには、この失敗が誰のせいでもないという諦めがあった。もうひとつには、若かつ

た。まだ、やり直せるとどこかで樂觀的に捕らえている自分を感じてもいた。

そのうち、いつか「こんな風になりたい」と空想することだけが、人生の楽しみになった。そのことを考えている時だけが、嫌なことをみんな忘れられる至福の時になったんだ。

バブル崩壊後、あまりよい話をきかない。

リストラは流行語になり、大企業の経営不振、中小企業の倒産はあつとを絶たない。

「それでも大丈夫だよ」と僕は簡単には言えない。誰もが立ち直れるほど状況は甘くはないだろう。精神力の強いわずかな人間だけが、再び平穏な毎日を送ることができる。

だけど、そのわずかな人間になれないと諦めるのはまだ早い。人生がうまくいかなかった時、人は人生について深く考え始めるものだ。今は行動の時じゃない、考える時だ。不幸をチャンスに変えることだってできる。この際、開き直って好きなことでもやってみるかと発想を転換させれば、案外うまくいくかもしれない。

少なくとも、僕はその可能性に賭けてきた。過ぎてしまえば、大きな試練も人生の通過地点にしかすぎないんだよ。

僕が会社を倒産させた時、考えたことはひとつだけだった。

これからは決して人に使われまい、決して人を使うまい。

いろいろな人に迷惑をかけた。自分自身も人間関係で嫌な思いをした。一人でやるなら再び失敗を繰り返したとしても、気分はずっと違うはずだ。どん底になろうと、自業自得と思えば諦めもつく。

「頑張れ」と人に声をかけることは失礼だ

事業の失敗は、わが身のコンプレックスなど構ってられないほど、苦く、大きな体験だったけど、そこから学んだことも大きい。中でもお金に関する自分なりの哲学を確立できたことは、その後の人生を変えた。

今でも金は嫌いじゃないけど、自分のやっている仕事以外で大金を掴もうなどと考えるのはやめにした。

バブルの頃には、この株を買うといいとか、この土地に投資すれば儲かるというような話が連日、僕のオフィスに持ち込まれた。信頼している友達からの話もあった。明日にでも大金が転がり込むようなおいしい話もあった。でも、僕はその一切に耳を貸さなかった。

あの苦い体験がなければ、おそらくそういう話に乗っていただろう。そうなれば、この歳

になってスツカラカンになっていたかもしれない。バブルの時に潤わなかった分、バブルの後遺症に悩まされずに済んだんだ。

近頃、「頑張れ」という言葉が気になるんだ。

クルマもそうだけど、人には進化しなくちゃいけないようなプレッシャーがある。少しでも前へ、少しでも上へ。

でも、本当にそれだけがいいことなのか？ 僕はクラシックカーに進歩は求めない。その時代のその雰囲気があればいいと思う。音楽だってそうだ。録音技術が進化して、コンピューターやエレクトロニクスが発達し、夢のような音で夢のような演奏を聴くことができるようになった。それでも、僕は、ナルシソ・イエペスがギター一本で演奏する『アルハンブラの思い出』や、ザラついた音質で聴くジャズも好きだ。

第一、「頑張れ」と人に声をかけられるほど、僕は偉くはない。

今は、マイペースでやっていくこと、平凡であること、ずっとその場所に止まることの大切さを考える時なんじゃないかと思うんだ。

僕の著書『間違いだらけのクルマ選び』は、ずっと同じコンセプトでやってきた。新しいことをするのもいいけれど、同じことを繰り返し言い続けていかないと、ただの流行りにな

はじめに

ぶ

つてしまふ。僕は、あの本を毎年書きながら、そんなことを思っている。

考えてみると、男が顔のことにこだわるというのはおかしいことだと思う。でも僕はずっとこのことを意識して生きてきた。

僕が美男だったかどうかとも考える。おそらく人生が違ったと思う。

人間、自分の生まれ、育ち、姿、かたちというものは選べない。だからそれぞれの人生になるのだし、おもしろいのだと昨今は気づいているが、それでも若い頃、20代、30代に美男だったかと考えずにはいられない。

そのことが本書を書かせた原動力である。人生いろいろだが、ぶ男にはぶ男なりの生き方がある――、それがプラスにもマイナスにもなる。

僕は努力しない男だから、ただ流れにまかせてきた。姿、かたちもなかば諦めに似たような気持ちでつきあってきた。

60歳になり、ようやく自分のスタイルが持てるようになった。このスタイルこそ男にとって大切なのだと思っている。

はじめに 1

1 コンプレックスだらけの「杉江」とコンプレックスレスの「徳大寺」

19

2 好きなことは記録せずに記憶する 23

3 モテるために一番大切なこと 29

4 コンプレックス×コンプレックス 33

5 自分はぶ男なんだと気づいた瞬間 36

6 自分に好意を持ってくれる女の子は真剣に愛する 43

7 シラノ・ド・ベルジュラック役の僕の初恋 48

8 コンプレックスのない人間は色気がない 51

9 青春渦中の失敗談 55

10 男に不可欠なのはユーモア精神 58

11 嘘のない恋愛はない 62

12 コンプレックスが武器になることだつてある 65

13 ぶ男だつたからこそ、お洒落になりたいと考えた 70

14 人生のどん底でつかんだお金の哲学 75

15 お金は友達と楽しくやれる程度にあればいい 78

16 ぶ男なら、せめてお金にきれいでいたい 81

17 「本気で遊ぶ」とはどういうことか 84

18 懐かしき、コンプレックスストレスの時代 89

19 結婚しない、という選択肢があつていい 94

20 ぶ男は本物の男らしさで勝負する 99

21	サラリーマンとして生きるために必要なある覚悟	105
22	オヤジ殺しのすすめ	110
23	僕の東京初めて物語	114
24	ぶ男十田舎者コンプレックス	117
25	足の長さコンプレックス	122
26	レーシングドライバー時代もコンプレックスの固まりだった	125
27	外国コンプレックスというのもあった	128
28	共通の趣味が友達を何倍にも増やす	133

- 29 優しさを貫くためには悪にもなる 137
- 30 ぶ男は女性をホテルに誘い込むまでが難しい 141
- 31 1に女、2に女、3、4がなくて5も女 146
- 32 女にもやりたいという欲望があるとは知らなかった 150
- 33 オチンチンコンプレックス 153
- 34 忘れられないクリスマス 156
- 35 男の遊び方にはコツがある 161
- 36 ハンサムもぶ男も人生は「ハーフ・ア・チャンス」 167